登山・登攀の記録

北アルプス　黒部丸山東壁右岩稜 「京都府立大学ルート」開拓

日時:1989 年 8 月 8 日～8 月 13 日

メンバー:伊藤達夫(コーチ)、下西勲

概要:丸山での新ルート開拓は、前年から予定していたものであった。この山行に備えて、下西と私は、3月から比良・天狗岩に通い、3本の新ルートを作り装備や登攀方法について検討を重ねた。山行の準備はちょっとした遠征並で、ギアをそろえるのに随分金がかかった。ハーケンを選び、ボルトのチップを削り、シュリンゲを作り、以前から撮影しておいた予定ラインの写真を虫めがねで眺めたり、出発1ヶ月前からは自分の時間をほとんど山行準備のために費やした。

記録

8日(火)　晴

黒部ダム(8:20)－ダム下河原(9:20)－丸山谷出合(11:95/11:20)－内蔵助谷出合(12:05/11:20)－ルンゼ押出し出合(13:35/14:00)→右岩壁下B.C(15:25)

水汲み終了・ベースキャンプ集結(17:30)

右岩壁下の下にベースキャンプを設営。内蔵助谷まで降りて水を汲み約30リットルをベースに運び上げた。本日中に展望台まで荷上げしたかったが、時間がなくなったので何もせずに夕食のカレーを食べて早めに寝た。

9日(水)　晴

行動開始(5:30)－登攀開始(10:30)－大木テラス(17:00)

早起きして出発準備をする。ベースにデポする物はほとんどなくザックから装備があふれて、これだけの荷物を持って登れるのだろうかと不安になる。展望台に続く岩稜の末端から2ピッチロープを固定し、一人二往復して荷物を集結する。展望台で荷上げ用ザックのパッキングを行う。6日分の食糧と水 23リットルを持つ。荷物が入りきらず結局ザックは3個になってしまった。

展望台からバンドを １０ m ほどトラバースし、浮き石の積重なったテラスを登攀開始点とする。下西がリングボルトを2本打ってビレーポイントを作る。予定通りの場所である。ギアを整理し、下西がトップで登攀を開始する。左斜上するくさったリスにハーケンを連打し、頼りにならないネズコの木のところから直上する。ボルトとブッシュも使い垂壁を登る。途中、アブミをかけたブッシュが折れて少し落ちた。連絡用の5mm ロープを使って、何度かハーケンとカラビナや水をトップに補給する。苦闘5時間、ようやくテラスに辿り着いたようで、「ビレー解除」のコールがかかった。

ルート開拓はフォローの時の方が大変である。トップは荷上げとセカンドの確保を同時にしなければならないし、セカンドは荷上げの補助とギアの回収をしなければならない。まず、5mm の連絡用ロープで一番小さいザックを引き上げる。次に、9mm のバックロープで水と食糧の入った大きなザックを上げる。これはすんなり上がって行かないので、トップが引くのに合わせてセカンドが押し上げたりしなければならない。そして予備のギアが入った3個目のザックはセカンドが担ぐ。しかし、このザックは金物ばかりが入っていて非常に重いので困難なピッチでは、荷上げザックの下に連結して二重連で引き上げる。

1ピッチ目のフォローはザックを担いでいったが途中でハーケンの回収が苦しくなり、荷上げロープにぶら下げる。ややかぶり気味のフェースは難しい人工登攀である。ブッシュにアブミをかけて荷上げの補助をしようとしてロープを引いたら、荷物は上がらずにブッシュが根こそぎはがれて宙吊りになってしまった。ユマールで脱出する。垂壁から傾斜がゆるみ草付凹角となり、最後はクラックをレイバックで登りマントリングでテラスに上がる。

1ピッチ目の終了点のテラスは壁にはえているネズコの大木に上から落ちてきた大きなフレーク

がもたれかかってできている。フレークの内側ではノービレーでも安全である。1ピッチしか登れなかったが先へ進む時間もないのでこのテラスでビバークすることにした。夕食にはメタクッカーでジィフィーズを作った。フレークの内側には一人しか寝られないので、下西がフレークの上の不安定なところで寝ることになってしまった。

8月10日(木) 曇のち雨のち晴

登攀開始(8:00)-2ピッチ目終了点(11:20/12:00)-3ピッチ目終了点・外傾テラス(18:20)

今回はつるべで登ることになっているので2ピッチ目は伊藤がトップで行く。ラインは大ハングルートのハング帯基部に続く顕著なランペにとる。右壁とのコンタクトラインにあるクラックから登り始める。キャメロットやアンクルハーケンがよくきまり、傾斜も緩いので快調に進む。途中トゲだらけのブッシュからフリーでスラブを左斜上し、再び人工となり豊富なリスにハーケンを連打する。小さなハングを越え少し登るとレッジがあったのでピッチを切ることにした。ランペは終りに近く、頭上には大ハングルートの巨大なハングが張り出している。いつのまにか雨が降り出したが右壁がかぶっているのでこのピッチには影響ない。

レッジにはペツルのボルトを 2 本打って万全の態勢で確保と荷上げを行う。下西君は素晴らしいテクニックでハーケンを全部回収してフォローしてくれた。このピッチではボルトを使っていないので残置物は皆無である。

3 ピッチ目は、まっすぐ進むと大ハングルートのハング帯に入ってしまうので、少しフリーで登ったあと右壁に移る。前傾フェースのクラックを人工で登りフリーで右へトラバースしてレッジの真上に出る。トップ下西はルートファインディングに苦しんでいたが、やがて傾斜の落ちたスラブに移って見えなくなった。トップの姿が見えなくなるとロープの出る速さが急に落ちたように感じる。しかし、多くの場合これは気のせいである。あせってもしょうがないので、行動食を食べたり、すぐにもつれてしまう連絡用ロープを捌いたりする。下を見ると展望台に続く岩稜の末端で大きなカモシカが我々を見上げていた。横を見ると中央壁がすぐそばにあるが、天気が悪いので誰も登っていなくてつまらない。3ピッチ目のフォローはラインが複雑なこともあって困難であった。荷揚を少しでも楽にするためにギアの入ったザックは担いでいったが、フリーがミックスしているので回収作業が大変だった。かぶり気味の草付フェースを越えると傾斜の緩いスラブがテラスまで続いていた。この部分は確実なピンがなくトップは恐ろしかったと思う。テラスに辿り着くとすでに薄暗く、ビバークとなった。

3ピッチ目終了点のテラスはブッシュも土もなく快適である。ハング帯の中にあるために高度感も素晴らしい。ビレーはペツル2本で完璧だ。問題は外傾しているために平らな部分がほとんどないことだ。伊藤はフレークの隙間にはまり込むようにしてなんとか座ることができたが、下西はセルフビレーにぶら下がったままになってしまった。持ってきたビレーシートはあまり役に立たず、ハンモックの必要性を感じた。夕食は、膝の上で苦労してメタクッカーを使い、アルファ米を炊いてふりかけをかけて食べた。内蔵助谷の登山道沿いの天幕場にはテントがいくつか見える。焚火も見えて羨ましい。情けない姿でハング帯にぶら下がっている我々のヘッドランプの明りを見て、下の連中はどう思っているだろうか。ハーネスに締付けられる脇腹の痛みに耐えながら夜明けを待った。

8 月 11 日(金)晴

登攀開始(6:00)-4ピッチ目終了(10:00)-6ピッチ目終了点・バルコニー(17:00)

テラスの上にはオーバーハングが張り出している。左には6月に登った大ハングルートのラインがある。我々の予定ラインは、ハング帯右端のコーナーである。4ピッチ目は、まずテラスから右にトラバースしてこのコーナーに入る。良いリスがなくボルト連打になってしまった。コーナーのハング下の部分には期待通りクラックがあり、キャメロット主体の人工で登る。出口で振り返ると、ちゃんとセットしたはずのキャメロットが1個ロープにぶら下がっていた。体重をかけているときは大丈夫だが揺れると簡単にはずれることがある。ハングを抜けると草

付とブッシュの凹角があり、フリーで登る。10mで広いブッシュテラスがあった。マントリングの苦手な私はどうしても這い上がることができず、ボルトを1本打ってようやくテラスに立った。ブッシュはどれも細いので、ペツルを2本打ってビレーした。下西君は順調にフォローしてきた。

昨夜はほとんど眠れなかったので本日中に何としてもバルコ二一に着きたいと思い、下西を励まして5ピッチ目に送り出す。ボルトを1本打ってブッシュに入り右岩稜のカンテラインへ登っていった。右岩稜のカンテラインはこの部分で二ルンゼの縁を形成している。即ち、下からは判らないが、一ルンゼと右岩稜が一体化している。したがって、我々のルートはここから二ルンゼへエスケープ可能である。右岩稜の初登ルートは2ピッチほど下で二ルンゼに入ってしまっているので、ここからバルコニーへ続く岩稜部分は未登のまま残されている。大ハングルートはずっと左の中央壁寄りの部分を登っている。我々は、右岩稜を忠実に登りダイレクトにバルコ二一へ出る予定である。

トップ下西は傾斜の緩い岩稜部分に入ったが意外に悪いらしくなかなかロープが出ない。そろそろロープの残り量が気になってくる頃、ようやくコールがかかりフォローすることになった。傾斜が緩くブッシュ混じりなので荷上げは苦しく、よれよれになってしまった。やさしいと思っていた岩稜は結構悪かった。下西は疲れているらしくビレー態勢が悪い。私も気が短くなり怒りっぽくなっていた。あと1ピッチでバルコニーへ出られそうであるがロープがぐちゃぐちゃになり動けない。時間をかけて整理してから登攀を再開した。

6ピッチ目はブッシュの腕力登攀でスタートする。下から見て簡単だと思っていたが傾斜に対する感覚がおかしくなっているらしく苦闘する。壁は立ち上がり、ブッシュは薄くなってきた。突っ込みすぎとはわかっていたが強引に登ってしまい案の定行きづまる。細いブッシュを束ねて頼ろうとするがだめだ。ボルトを打つことにする。バランスを崩しそうで思いきりハンマーを振ることができない。岩は軟らかいが穴がきれいにあかない。そうこうしているうちにスタンスにしている草付が崩れ始めた。もうパニックである。ここで落ちれば 10m以上の大墜落だ。限度ぎりぎりの深さの穴で我慢し、ボルトを打ち込みタイオフしてアブミに乗る。最上段からハーケンを打ち安定した岩のスタンスに立って危機を脱した。フォローの下西は重いザックを担いでいたので、体重をかけたとたんにこのボルトは抜けてしまった。ここからはさらにボルトを1本打ち、草付をフリーで登ってバルコ二一に出ることができた。荷揚をすませ二人揃って久々にくつろぐことができた。

濃いガスがわいてきたのでツエルトを被って夕食をすませた。ガスは夜になると消えてしまった。丸山では天気が良かった日ほど夕方に濃いガスが発生するようである。バルコニーのテラスは広いが両側がニルンゼと中央壁に向って切れているので不安定である。それでも横になってからだを伸ばして眠ることができた。

8月12日（土）　晴

右岩稜下降開始（13:00）−下降終了（16:00）

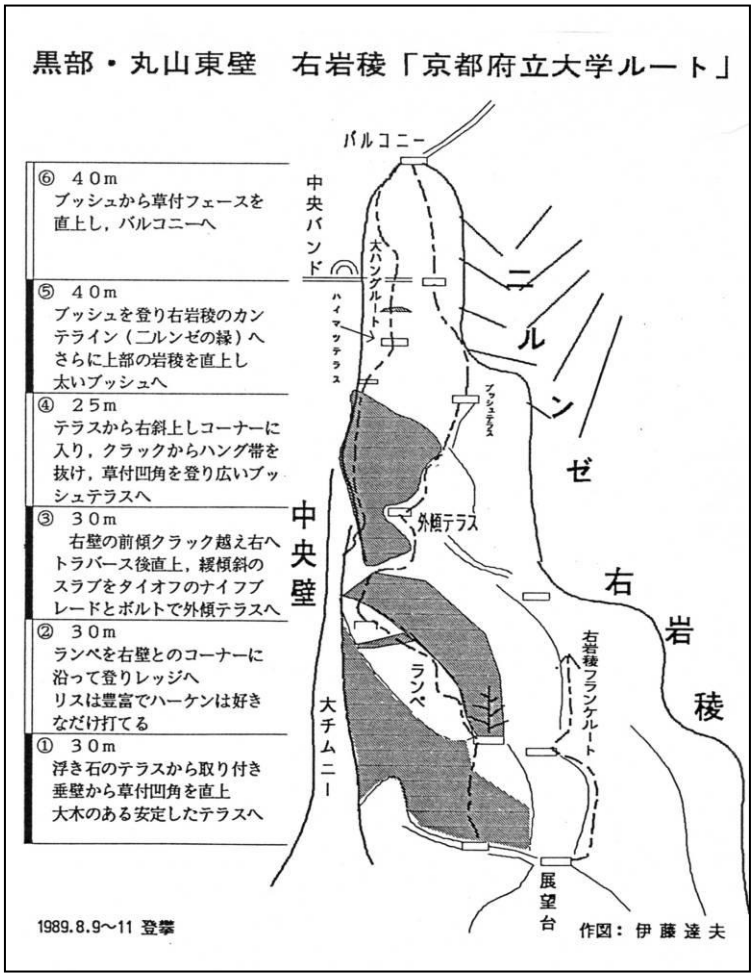
3日間登り続けて疲れたので午前中は休養とする。そして、壁を見上げたり写真を見たりして上部壁のラインを検討する。下部のラインは十分研究していたが、上部については良い写真がなくどこを登るかはっきり決めていなかったのだ。いろいろ考えてみたがボルトラダーかそうでなければブッシュ登りになりそうで、疲れていることもあって、結局バルコ二一を終了点として下降することになってしまった。上部のラインを決めておかなかったことが敗因である。

午後から右岩稜を支点の整備をしながら6ピッチのアプザイレンで下りベースに戻り、4日ぶりにセルフビレーから解放された。

8月13日（日）　晴

ベースキャンプ発（4:40）−黒部ダム（7:00）

朝一番のトロリーに乗ろうと思って早起きして薄暗いうちに出発する。くそ重いザックに押し潰されそうになって歩く。ダム下の河原で放水の始まる瞬間を見物した後、いつもの苦しい登りを済ませてダム駅に着いた。大町からは急行くろよんで京

都に帰った。

下西にとっては初めての、私にとって久々のルート開拓であったがまずまずの成果であったと思う。頂上まで行くことはできなかったがラインの美しさには満足している。ルート名はさんざん悩んだ末に「京都府立大学ルート」とした。最近は訳の解らないルート名が多いので、昔風に大学名を付けてみた。